

閣下に憑依した中二病がこの素晴らしき世界に来るそうですよ？

三頭龍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世間的に中二病とか言われる俺は世界に不満を持っていた。

「何故、世界に魔法が無い」「何故、世界は科学を選んだ」「何故、俺は弱い」「何故、俺は反社会的コミュニティに居る」と…

そんな日々を退屈と認識し、転生に賭けて自殺する。

女神に阿呆だのバカ呼ばわりされたが賭けに勝利した俺…我こそアジ♨ダカーハ！

この世界に悪の御旗を掲げる為今日も街で情報収集。

目次

「転生の為に俺は死んだああ!!」	1
「暴虐の三頭龍…って駄目じゃん!？」&「新たな出会いがあるらしい」	5
「我が勇者は何時現れるのやら…」	10

「転生の為に俺は死んだああ!!」

「あなたは死んでしまいました。本当に阿呆ですね」
って訳で俺は死んだ。

17歳に成り高校に通う俺だが…退屈だ。

まずだ、何故俺はツマラナイ世界に生まれた？俺ならもつと出来るはずだ！何故俺はあの反社会的コミュニティに行かなくては成らない？

世間的に言う中二病らしいが俺は気にしない。

付け足すならば、そのあと記憶がない。

目の前に居る女神様いわく、

『バカなの？転生目当てで自殺するとかコツチも迷惑なんですけど!?!』

だそうだ。俺特で好都合だ。

「あなたには2つの選択肢があります。

人間として生まれ変わるか、天国に行くか」

この女神も駄目だ。

さつき自分で転生目当てとか言った癖に理解してねえー

「だから転生だから？転生目当てで自殺したんすけど!?!」

俺は少々反切れ気味だった。

逸れもこの女神が理解しないのが悪い。

「うーん。生まれ変わると記憶はなくなつてあなたという存在は消えちゃうし、天国は何もないところですよとひなたぼっこでもしながら世間話するぐらいしかやる事ないわ。」

ヤバイ…!?!コイツ全く人の話を聞かない系の奴だ。

「うんうん、やっぱりどっちも嫌よね。そこで！ちよつといい話があるのよ」

来た…コレから言われる事に予想は付く。

「いや、だから…御託は良いから」

「テンプレって分かる？ムードよムード分かる!?!」

「え!?!ちよ、マジすんませんした」

何故かこの俺が誤る羽目に成った。ユルサン……
女神は少し大きく息を吸って問う。

「あなた…転生して見ない？」

やっぱり…

俺の予想は予定道理簡潔に実行された。

*

女神の長つたるい話をまとめよう。

異世界に魔王が居たの、

Ⅱ世界的にピンチ!?!的なノリで、

何やかんや魔法が有りの剣とかとかⅡモンスターがうじゃつてる
感じで、

Ⅱ遣られた雑魚…勇敢なるお人様が死んだⅡビビりな人々が…出
会いを求める人々が其処の生まれ変わりを拒否っちゃうらしい。

Ⅱ人口が減って滅んでしまうような。

「で、それなら他の世界で死んだ人を送り込もう、って事になってね？
あなたのような阿呆な人を送り込んでいるの」

言えば捨て駒だな。

逸れでも良からう的なノリなのは死ぬ前から理解して居た。

そして！スライムとかに瞬殺されるんじゃないだろうか。

「自分には無理、って顔してるわね？大丈夫、その辺の対策もあるわ。
送ってすぐ死なないように、何か一つだけ。向こうの世界に好きなも
のを持って行ける権利をあげているの。強力な特殊能力。とんでも
ない才能。神器級の武器。……どう？あなたは人生をやり直し勇者
になり、異世界の人々にとっては即戦力になる人がやってくる。ね？
悪くない話でしょ？しかも魔王を倒せば願いを一つ叶えてあげるわ。
そのまま日本に帰してあげることだってできるわよ？」
待っていた。

「この日が訪れるこの時を！」

「フハハ……俺は異世界行きを選ぶ！」

「いい答えね。では、選びなさい。どんなものでも一つだけ。異世界に持っていく権利をあげましょう」

差し出されたカタログを見ると、そこには《怪力》《超魔力》《聖剣アロンドイト》《魔剣ムラマサ》……その他諸々、チートの数々が記されていた。

俺的にキャラクターの能力が欲しい所だ。

「じゃあ、神を殺せる武器をください」

「バカなの？無理に決まってるじゃない！」

此処で最初に盛ってお願いする。

次を軽く見せれば逸れでおkに成ると踏んだ。

「んじゃ、問題児シリーズ 第四桁以上のキャラクターで!!」

コレが受理されれば俺の勝ち。

女神が問題児シリーズを完全に理解して居れば俺の負け。

さあ、どう出る!?

俺は汗を掻きながら女神を見る。

「それでいいのね?では、アナタの願いは受理されました。キャラクターはランドムですのでお気を着けて」

勝ちゲーだわ。

「じゃあその魔方阵から出ない様に」

光に包まれていく。

待って。僕は勇者に……

「さあ、新たな勇者よ!願わくば、数多の勇者候補の中から、あなたが魔王を打ち倒す事を祈っています」

「さあ、旅立ちなさい!」

目を覚ますと、そこは完璧なる異世界でした。

そして、俺の容姿は……

「まさか……まさかの閣下来たああー」

俺の大好きな閣下の容姿でした。
ありがとう女神！だがこれで我とは敵同士と成った。
閣下に成りきる為に此から努力すると心に決めた。

「暴虐の三頭龍…って駄目じゃん!？」&「新たな出会いがあるらしい」

*

異世界に転生して来た彼は取り敢えず街を目指す。

女神は不親切な事に見知らぬ場所に一人置き去りだ。

自分こそ今やアジィダカーハ。

ならば、【千の魔術】さえ使えるはずだろう。

【千の魔術】で情報収集系魔術を起動する。

…どうやら此処は街から離れた地点らしく兎に角北を目指す事にした。

途中にはモンスターに出くわした。

見るからに…トウラコウクエストに出て来る奴だ。

「トウラコウクエストに奴に似た生物が居たな…確か、につかくウサギであろう」

因み情報収集系魔術の検索結果は…

登録No. 1 【につかくウサギ】「ウサギピウケモン」

魔王が生み出したかもしれない悪の心を持つ角が二本有るウサギで獣系。

初登場時に名前がひらがな表示だったのは、当時は一部のカタカタが使用できなかった為とされる。

但し余り強くは無く言わば雑魚モンスター。

要らないな情報まで入って来るのか…と思いつつ自身の力を試したく成った。

「ほう。我の力を試してやろう…光栄に思うが良い!!!」

彼が振り下ろした手は…正確に言えばチョップだが、当たる前に失神し当たれば完全消滅した。

「…さて、次に進むとしよう」

何事も無かったの如く過ぎ去る。

につかくウサギが居るならば高地だなど推測出来る。

逸れから連なり伸びる山を登って行くと…

空を翔る鷲でライオンなアレは——

「——遂にグリフィンのお出ましと来るか…」

登録No. 2 【鷲獅子（グリフィン）】 【鳥ピュケモン】

鳥の王にして獣の王。

翼を推進力として飛ぶのではなく、空を踏みしめ空中を走って飛んでいる。

獣王である獅子と王鳥である鷲の因子を持つグリフォンは、ギリシャ神群の主神ゼウスの戦車（チャリオット）を牽き、黄金を守る役目を与えられた、いわば神獣に該当するがこの世界ではソコまでである。

彼は山を足場に空中へ跳躍し自信の翼を使いグリフィンを追い掛ける。

少しずつ翼使いに慣れ加速して加速して加速して…

グリフィンと横に並んだその瞬間に彼は爪を入れた。

グリフィンから飛び散る血飛沫は彼の白い身体を朱く血で染め上げて行く。

“彼”——否、魔王 “アジィダカーハ” は、殺すことで満足と快感を得る。

その三つ首の全てを用いて、天地に産声をもたらす。

「——GYEEEEEEEEEEYAAAAA
AAAAAaaaaaa aaaaaaYAAAA
AAAAAaaaaaa aaaaaa
aaaaaa aaaaaa!!!」

その後——周囲にモンスター死骸が残り辺りに出て来るモンスターは居なくなつたとの報告が冒険者ギルド

に入り調査任務に派遣された者が多いと聞く。

*

逸れから彼は歩く事を止め己の翼を使い空から街を探し、初見モン

スターが居れば容赦なく殺す。

そして、人類としては高レベルの冒険者集団を襲い武具を壊すだけ壊してリーダーを高度何千メートルまで投げたり、それこそ重傷を負わせた者も居た。

「つまらん…この程度では退屈しのぎにもならん」

彼は強すぎた…その力はこの世界の魔王とは比較にならない程規格外のかけ離れた存在だ。

目的地を変更した彼はこの世界を隈無く散策する事に変更し、見つけたのは…ダンジョンの出入り口だった。

ダンジョンの出入り口には一人の女性が居が彼にはモンスターにしか見えず爪を立てて刺し殺そうとした。

…が、彼女を刺し殺す事は無理に終わった。

彼女は彼が殺しに向かって来る事を察知して魔法を使用していた。

「えっ？何!?ら、ライト・オブ・セイバー!!!」

彼が本気では無かったもの、真正銘彼女は魔王アジィダカーハの一撃を防いだ事には無いです。

彼は其処で荒ぶる衝動を理解し押さえ込む事が可能と成り、三頭と六眼で冷静に分析する。

先程の言葉を直訳するなら【光の剣】であり、目の前に有る剣の見た目こそ光の剣であった。

彼は腕を爪をゆっくりと引き感謝を伝える。

「我を止めた事に感謝する。なんだ、その…怪我は無いか？」

彼女は彼の表情を確認して魔法を解除して首を横に振る。

「えつと…私はウイズと言います。魔道武具店を始まりの街【アクセスルの街】で経営して今は素材調達の為に、この世界最大ダンジョンから帰って来た所ですが…あなたは、もしかしなくてもアジィダカーハ!?!」

この世界にアジィダカーハの伝承が有るのか…転生者が伝えたのかは謎だがお陰で手間が省けた。

「如何にも『拝火教』神群が一柱、五大魔王の三頭龍…我こそ人類最終試験 魔王アジィダカーハ!!!」

それは彼が好きならアジィダカーハの言葉である。
その言葉の重みを理解した上で言う義務がある。

「アジィダカーハ良いですね！あつ、でも街に行くなら偽名を使うと良いですよ…冒険者登録するならバレますがね。それと、これも何かの縁でしようから私がレポートで好きな場所へ送りましょうか？」
ウイズは子供のような眼差しで此方を見ている。

誘いに乗りますか？誘いに乗りませんか？

Yes

▷ No

「今回は止して置こうか。それとウイズと言ったな…我はお前が気に入った。リッチーで有ろうと今度は冒険に乗って貰うぞ」

そう言っただけは立ち去って行った。

ウイズはそんな背中を見つめて一つ頷いていた。

*

彼がウイズと別れて数分後。

彼は見知らぬ冒険者らしき輩に絡まれて居た。

貧弱防具に貧弱武器に貧弱能力値の貧弱馬鹿集団がぎつと五十人体勢で周辺を占めていた。

だから、彼は一言阿呆共に告げた。

「その貧弱装備で我を倒せると心得るならば…来るが良い。我こそ大魔王アジィダカーハ！後に悪の御旗を世界に轟かせし者!!そして、踏み越えよ——我が屍の上こそ正義であるツ!!!」

彼はこの集団を含む全種族に宣言する。

魔王である以上は、この世の全てを敵に回す者である。

その声は木霊してとある少女の耳へ届く。

その声は不可能と知って居ても尚、手を伸ばし続ける魂の声と感じた。

そして、彼女は魔法で街へ戻り目標へ…手を伸ばし続ける事を心に刻み込んだ。

果たして 閣下は世界に悪の旗を轟かせられるか!?

閣下を打倒する英雄は現れるのか!?

悪の旗が砕けるときが来るのか!?

「我が勇者は何時現れるのやら…」

とある噂話を冒険者から聞く。

曰わく、何故か低レベルで世界トップクラス。

曰わく、この頃上記が頻繁に発生。

曰わく、魔王の城否、別の目的遂行。

我が転生を果たして数時間でこの騒ぎ。

察するに天界で神々が多量に送り込んで居ると。

我はそんな輩を目の前に少し期待を持つ。

神器を持つならば我が悪の御旗を打ち碎けるのかと。

「いざ来たれ英傑共よッ！死力を尽くせ！知謀を尽くせ！蛮勇を尽くし我が胸を貫く剣となつて見せよッ！」

彼の宣言はチート持ち冒険者の足を動かす。

一人、伝説の武器を所持していた。

戦いますか？逃げますか？

Yes

No

「俺の名前はリク！お主の首を頂戴しようか」

彼は冒険者に絡まれた…

彼に選択の余地は無く、相手は既に王都でも名を馳せる強者の一人。

リクが切りかかるものの、彼は軽く自身の爪で弾く。

確かに今までのモンスターは断然強者だが…モンスターは彼からすれば皆雑魚に分類される。例外を除いて…

我は形状から千の魔術を起動し検索に入る。

飛び交い剣は障害物を意図も簡単に切り裂き彼に迫るが難なく避けながら剣を誘導し他冒険者を滅する。

形状と飛び交う神話武器の正体は、北欧神話から…勝利の剣と結果が出る。

リクの特典は北欧神話で有名な勝利の剣。

持ち主の意志に反応し望むままに洗浄を飛び交い切り裂けない物

は無いとまで言わせる伝説の剣。

リク自身は特にする事も無く安全圏から剣を操って居るに過ぎない：これから察するにリク自身は弱者と。

方針が決まれば後は実行あるのみだ。

勝利の剣が飛び交う中、彼は軌道を見切り一撃を入れる。

勝利と言う固定概念を前にしてアジールダカーハは全身全霊で勝利を弾く：此こそ我が目指す閣下であろう。

確かに剣は最強の伝説の剣かも知れない：

だが、実態は経験が未熟な上に神を裏切らないように制限が有る為
我に当たることは無く敗北していた。

それ所か彼が避けてる間に数人は重傷を負っている。

コントロールが上手く無い：どちらが悪だが、

一人、大魔法使いが現れた。

戦いますか？逃げますか？

Yes

No

「私はアロン！貴様は私の餌に過ぎない」

彼は魔法使いに絡まれた：

彼に選択の余地は無く、相手は世界トップクラスの大魔法使いであろう。

魔術vs魔法の対決が此処に始まる。

両者共に詠唱を開始し始めると周りの冒険者は全力で四方八方に逃げ出す。

両者同時に発動した。

魔法使いなアロンは、マラゾーマを繰り出す（約二千度）

魔術を使用する我は、翼を使い空へ上がりマラゾーマを交わしつつ、水の魔術+氷の魔術+雷の魔術により拘束し雷を一撃与えて終了した。

本来は魔術など使わず自身で戦う方が強いは楽だ。

我の場合は同時に3詠唱か1詠唱を3分割させられる。

確かに実力が有るのは理解した。

…が、故に我は強すぎたことを改めて理解した。

「…つまらん、我が罰だ。絶望をくれてやる」

今日こそ面倒に成り周囲一帯を魔法陣として、大魔術を発動させる。

周囲の草木は燃え上がりモンスターさえ煉獄に焼かれチート冒険者こそ無事だがすぐさま逃げ出す。

……一人の青年を除いて

その青年は伝説のロット風な姿をしていた。

手に握るのは魔剣だが評すべきはその勇敢さ…しかし、愚かさの方が勝る。

「貴様が我が勇者と成り得るか…見せて貰おうか!!」

この勇敢で愚かな者の為に…

我は、再度構えを改めて攻撃に望む。

「僕は美しき女神に、この魔剣グラムを戴いたミツルギキョウヤだ！」

魔剣グラム…北欧神話最大英雄の一人・ジークフリートが愛用した剣。

主神オーディンが林檎の木にさし財宝の後継者候補者を募らせ結果としてジークフリートが国や王位を手に入れ最終的にはオーディンに折られた剣。

ミツルギが切りかかるも剣術は淡く紙一重に避ける。

対術を心掛けて居るようだが大陸程の質量を三メートルに圧縮した彼はビクともしない。

魔剣グラムは石は簡単に断ち切るが閣下の爪以下だ。

簡単に弾かれ腹部に一撃彼の拳が入れば鎧は碎ける。

「終わりだ、今を生きる愚かな勇者よ。貴様では——この『悪』の御旗は碎けないッ！」

ミツルギキョウヤは腹を押さえて膝を着く。

その絵は、勇者が魔王に屈服するかを思わせる絵だ。

「……………!!!」

絶句。

だが、ミツルギの頭に一言のみ過ぎる。

「な…なんだお前は」

息を切らしながらもミツルギは我に問う。

お前は何者かと…

「我こそは悪神、魔王アジィダカーハ。宗主より全人類の悪を背負いし不倶戴天の化身なりッ！」

その言葉は屈服させる所かミツルギを立ち上がらせる。

「…な、なら僕は…お前を倒さないと生けない理由がある！だからお前を倒す…魔王アジィダカーハ!!」

魔剣グラムに光が集まり光り始める。

光が集まり終わると剣を構え一撃。

ミツルギと魔剣グラムが今出せる最大の一撃。

彼は動くこと無くその一撃を受ける。

これが人類の意志の力か…

かつて彼が棄てた世界と人間の身体。

彼——ミツルギキョウヤは、どちらが強者かを弁えた上で自身の意志で立ち上がり最大の一撃を放つ。

ミツルギの全力は彼の純白な皮膚を少し血で染める。

その血から、新たな眷属が産まれる。

「ちっ、僕の全力を持ってもこの程度か…」

地面を強く己の拳で叩く。

崩れ去る身体に最早立てる力は残って居ない。

「誇るが良いマツルギよ。貴様は我に傷を負わせた…これからを楽しむにしている」

「ミツルギだああああ！」

ミツルギの意識は其処で無くなる。

我は彼の足を掴み西の方角へ投げ飛ばす。

ミツルギは馬車の上に落ち一命は取り留めたようだ。

ただ、残念な事に今日の記憶は無いようだ…

焼けた森に残る生物は我と…小鳥一匹だ。

近寄る鳥は、我の足元に舞い下りる。

「許せ…我は悪に生きる者故だ」

そして鳥を持ち上げ握り潰す

…事は出来なかった。

六つの目から流れるものは——涙。

我は、今悲しんで居ると実感した。

転生して、閣下に成つて気づく——彼女が人間を愛したように自分は生き物を愛して居るのだと…

故に目的は変わらない。

俺が存在すれば何か死ぬ——ならば我を殺せる者を集めるしかない。

悪の御旗を——魔王として世界に君臨する。

さすれば、いつの日か我を打ち碎けるだろうと。